

アドルノ美学における形象の問題

高安啓介（愛媛大学）

ドイツ語でいう形象 Bild はおよそ英語の image に相応するが、ドイツ系美学において、形象の語は、各思想をつらぬく鍵語であるとともに、芸術諸学とのつながりを深めるうえでの鍵語にもなっている。たとえば、現象学や解釈学といった思想の流れをみても、ベンヤミンやアドルノといった思想家それぞれの仕事をみても、独自の形象論が埋め込まれているといえる。さらにまた G・ベームらによって、新しい学として形象学 Bildwissenschaft を打ち立てる動きもみられた。注目すべきは、現代の形象論が、芸術の所産としての作品にかぎらず、広告分野から医療分野にいたるまで、研究対象をますます拡大していることである。

形象論における重要な問題の一つに、形象の禁止 Bilderverbot をめぐる問題があげられる。形象の禁止は、神を描いてはならないという宗教上の戒律としてみられたが、二〇世紀においてイメージを作ってはならないという戒律は、非対象絵画からホロコースト記念碑まで、複数の文脈のなかに回帰してきたとみられる。形象論において形象の禁止がとくに重要なわけは、形象の存立にかかわる根本問題だからであり、芸術の存立にかかわる根本問題だからである。さらにまた、現代人にとって形象の禁止がとくに切実なわけは、形象の氾濫にたいして反省をうながす問題であり、美学と倫理との接点となる問題だからである。形象の禁止とは、広くとらえるならば形象批判のことであって、形象の不在という状態において弱く現れることもあれば、形象の破壊という行為において強く現れることもある。

以下では、アドルノの『美学理論』から「形象論」を取り出すことで、現代美学の関心に応答しようとする。『美学理論』はあくまで作品という形象について論じているが、形象への鋭い批判をはらむからである。このところを取り出そうとする試みははまだ十全な私たちではみられない。なお『美学理論』では、作品という形象への問いは、多くのところで、作品という仮象への問いとして論じられている。すなわち、作品という形象はおのずと仮象だということである。アドルノにとって、仮象 Schein とはまずは見せかけのことであって、作品はたしかに仮象であることに満足してはならないが、作品がなお仮象にとどまることは真理の現れにとって不可欠でもある。そこで『美学理論』から「形象論」を取り出すにあたっては三つの段階をとりたい。第一に、アドルノが作品について論じるときに考えた基本を押さえる。第二に、アドルノが作品をいかなる形象として理解していたのかを明らかにする。第三に、アドルノが作品をいかなる仮象として理解していたかを明らかにする。さらに以上のことに加えて指摘したいのは、アドルノがそれまでの音楽論では厳しい仮象批判を繰り返してきたのに、最期の『美学理論』では仮象批判はかなり穏やかになったことである。